



杜甫農業詩研究—八世紀中国における農事と生活の歌

古川, 末喜

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2010-02-17

(Date of Publication)

2010-08-17

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

乙3094

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2003094>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名 古川 末喜
博士の専攻分野の名称 博士（文学）
学 位 記 番 号 博ろ第 3094 号
学位授与の要件 学位規則第 5 条第 2 項該当
学位授与の日付 平成 22 年 2 月 17 日

【 学位論文題目 】

杜甫農業詩研究

審 査 委 員

主 査 教 授 釜谷 武志
教 授 緒形 康
准教授 濱田 麻矢
講師 村井 恭子
大阪市立大学大学院文学研究科教授 齋藤 茂

論文内容の要旨

氏名 古川末喜

論文題目 杜甫農業詩研究

本論文は、詩聖また憂国憂民の流浪の詩人、律詩の大成者などと評されてきた杜甫の詩を、農業詩という観点から見直し、新しい杜甫像、杜甫文学を発見し、その新たな文学世界の構造を分析し、開示して見せたものである。

また前近代の中国では、農業を基盤とする社会において文学や思想が営まれてきたことを考えれば、農業という視点を文学の中に持ち込むことの有効性が、この杜甫農業詩研究によって実証されたともいえる。これによって、これまではっきり説明できなかった杜甫の情緒や詩の陰影部分が、農業という視点によってはじめて明らかとなった部分が少なくない。

中国詩には、作者の生活事実にもとづき、現実世界を写實的に描く伝統があり、その傾向は特に杜甫において顕著である。したがって読者は詩を現実の生活が描かれたものとして読み、作者もそのように読まれることを期待している。そういう詩のあり方であってはじめて、農業詩という観点で新たに杜甫詩を読み直すという方法論が意味をなしたといえる。

本論文では、杜甫がいくつかの流浪の地で農業を実践した事実を詩の中から掘り起こしつつ、年代順によって叙述していった。

まず第1部では最初の流浪の地である秦州期について考察し、杜甫がどのような場所を隠遁の候補地と考えたのかをすべて洗い出して整理した。その作業のなかで、杜甫が隠遁の最適地と考えるとき、その地が農業に適しているかどうかが重要な指標となっていたことを明らかにした。秦州では結局、官僚としての人生から隠遁生活への着地がうまくいかなかったのだが、実はその失敗は無駄だったのではなく、その後の成都草堂で一気には花ひらく隠遁生活、農的生活への、シミュレーションとして機能したのだと結論づけた。

次に、秦州隠遁期の詩に、杜甫がいくつかのラッキョウ(薤)の詩を作っていることに着目し、杜甫が詠じた薤(ラッキョウ)の詩は、六朝までの伝統的なイメージに新たなものを附加したものであったことを実証した。それによって農作物の一つであるラッキョウが、杜甫の詩以後、隠者の農的生活の中で食料や薬材として栽培され、また友人に送ったり、所望したりし、隠遁生活を描く際の一つの重要な詩の題材となったこと、そして中晩唐、宋代以後の詩人は杜甫の作り出したこの新しいイメージを踏襲していることなどを論じた。

第2部では、次の流浪の地である成都期において、どのような舞台、外的環境のなかで杜甫の農事がなされていたかを考察した。杜甫は、成都草堂の外的環境、地理的景観をいろいろな角度から繰返し詠じているが、それらの描写は互いに矛盾しない。そのことから杜甫が草堂世界をかなり写實的に描いていたことがわかる。それらの描写から草堂の地勢、植生、景観など実際の様子を復元し、その結果、杜甫の成都草堂が、農園というよりは、農業をも含みこんだ所謂士大夫が隠遁世界として営む大きな「園林」であったと位置づけた。

次に、杜甫の成都草堂の時期は、草堂附属の作物や農事に対して、曖昧かつ傍観的な歌い方をし、それらの詩のなかでは人生に悲観的・消極的な気分が濃厚である。一方、草堂の庭園作りほか、農事以外の諸々の生業に対しては積極的な詠じ方をしていく。そこからこの時期が農事そのものというよりは、農事を含みつつ、それよりさらに広い生業に関する詩が優越していることを論じた。そして草堂時代の杜甫詩の一特徴として、「生業詩」という視点を持ち込むべきことを主張した。

次の流浪の地である夔州で、杜甫の農的実践は本格的となるが、第3部では、この夔州期の農業について取り上げた。まず夔州での農的生活はどのような舞台を背景に為されたのか、その状況を詩の中からできるだけ具体的に明らかにしようとした。その際、瀘西宅が梅溪河の西岸にあったとする旧説に対し、草堂河の西岸であったと考える近年の簡錦松『杜甫夔州詩現地研究』の新説を支持する立場から、いくつかの新たな根拠を付け加え、瀘西宅にあったときの杜甫の意識

なども明らかにした。

この時期、杜甫は現地で数名の異民族の使用人を私的に雇用し、自分の農的生活を支えてもらっている。本論文では、この使用人達をめぐって詩を取り上げ、詩の中で使用人の姓名を呼んだり、その働きぶりや性格の良さを称讃したりしていることに着目し、それまで無名性の中に埋もれていた最下層の使用人を、杜甫が個人としてはじめて認知したこと、その背景には安史の乱後の社会構造の変化があることなどを論じた。またそれらの詩は広い意味で生活詩と呼んでいいものだが、その生活詩が杜甫の夔州でのあらたな詩創作の試みであり、実はそれが、後の白居易や宋代の詩の生活詩の先駆となっていること等を論じた。

さらに夔州期には、従来にない杜甫詩の新しさが顕著になるが、その一端を農業詩の観点から具体的に分析し、なぜそういうことが可能になったのかを考察した。「狎楚童」「賦斂夜深歸」「見清砧」の三つの表現に絞って、これらが、事実にもとづいてそれをそのまま描写しながら、それがいままでも誰も意識に上せなかった事柄の描写となっており、結果としてそれが杜甫の詩の新しさの一つとなっていることを指摘した。なぜそのような表現が可能になったのか、その理由の一つとして、瀘西における底辺層の人々との密着した杜甫の農的生活、住まいのあり方がその根底にあったからだと考えた。

第4部では、夔州期の具体的な農事について、蜜柑園経営、野菜作り、稲作経営の三点から論じた。

柑橘を詠じた詩が他の時期にはほとんど作られていないにもかかわらず、この夔州期に集中して作られていることを明らかにし、杜甫と柑橘詩の関係を農業詩の観点から考察した。杜甫の詩には、柑橘園の経営者としての意識が垣間見えること、さらに従来の憂国・憂愁の杜甫像とは異なり、柑橘詩のなかでは杜甫の気分が明るく華やいていること、そのことから、杜甫の農業詩が杜甫の晩年の詩風の拡大に一役買っていること等を指摘した。

次は、杜甫の野菜作りの詩について論じた。夔州一年目に杜甫は既に自分の畑を所有し、レタスを植えて失敗したが、二年目の瀘西草堂では、牛耕によってカブ作りをし、余ったカブを城内の市場で売り、旅費の一部とし、さらに種々の作物も作っていた。そうしたことを、詠じられた詩の中から具体的に明らかにした。元来野菜好きの杜甫は、経済上健康上の必要からもよく野菜を食べ、詩に詠じたが、野菜詩での杜甫の情緒は安定し幸福であったと論じた。

最後は、杜甫晩年の、夔州東屯における稲作経営にまつわる詩を取り上げ、杜甫の稲作経営の実態がどのようなものであったか、稲作を詠じる詩にはどのような特徴があるか、稲作詩の杜甫詩における意義、また白居易の生活詩や宋詩につながる文学史的意義などを論じた。

杜甫の稲作詩は、野菜作りの詩などに比べて、具体的な農事があまり描かれず、収穫を独占する事への自戒が何度も強調されている。収穫と題する詩でも、収穫そのものではなく、食べる喜びが繰返し詠じられる。これらの特徴は、米作りが他の農事に比べて重労働で農奴達を搾取している構造が見えやすいこと、水遣りや除草をテーマにした長編詩が、現場に赴かず伝聞と空想で描かれていること、水田のある東屯には収穫の時にはじめて引越したことで、杜甫の米作りが、通説のように夔州府の公田を管理経営したのではなく、杜甫の所有する私田で、旅費作りの一環として行われたこと等々と関係がある。杜甫は農民たちの農作業の苦しみを告発したわけではなく、それらの詩は、杜甫(中唐)以後の農業詩の課題であるが、杜甫の米作りの詩は士大夫が農事の直接の当事者となって描いたものとしては、量的にも質的な高さでも他を圧倒する空前絶後のものであることを論じた。また最後に杜甫が収穫後の米を米市場で売っていた可能性についても言及した。

中国の隠者が田園に隠遁した場合、いくばくかの農事をなしそれを詩に描くものだが、その農事詩は隠遁生活をいりどる一題材としてある。しかし杜甫の場合は、もっと現実的な必要に駆られたものであり、隠遁指向の詩人達の観念的な農事詩などよりは、詩の水準を大きく越え出ている。情景がありありと目に浮かぶ迫真性、具体的な描写、実際の生活にもとづく親近性、読者を飽かせないストーリー性、話題転換の巧みさ、詩に込められた感情の真实性・寓意性・思想性など、他の追従を許さない。杜甫の農業詩の諸相は、決して詩聖、憂国憂民、憂愁、流浪など、これまでの杜甫詩に冠せられたイメージではなくることができず、それらを大きくはみ出したものであったし、杜甫以後、これほどの豊穡な農業詩を創作し得たものもいなかったと考えられる。よって杜甫の詩世界を考える上で、今後農業詩というジャンルは不可欠のものとなるであろう。

論文審査等の結果の要旨

論文提出者氏名	古川 末喜
論文題目	杜甫農業詩研究

1 審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	釜谷 武志
副査	教授	緒形 康
副査	准教授	濱田 麻矢
副査	講師	村井 恭子
副査	教授 (大阪 市立大学)	齋藤 茂

2 論文審査の結果の要旨・・・別紙1のとおり

3 試験の結果の要旨・・・別紙2のとおり

4 学位授与の可否

上記の論文審査及び試験の結果、並びに学力の確認の結果、論文提出者は博士 (文学) の学位を得る資格があることを認める。

神戸大学大学院人文学研究科

についての考証と農業を題材にした内容の考察とを行なっている。草堂の位置については古来議論のあるところで、現在浣花草堂とされている場所が、杜甫の住まっていた草堂ではない可能性が大である。本論文は杜甫の詩に見られる草堂に関わる記述を総合して、本来は成都の城郭に近接した西郊にあったと推測しており、詩文の記述から判断したところ、矛盾をはらむことのない概ね妥当な結論と判断できる。杜甫の詩のみによるだけでも彼の生活や草堂の景観をある程度復元できることは驚きに値する。杜甫以前の詩においては、園林や隠遁生活の描写があっても、虚構の要素を含んでいて千篇一律の印象を否めなかったが、ここに至って現実の裏付けをともなった詩作態度を具えるようになったと指摘している点は、誰しもが首肯できよう。

第Ⅲ部・第Ⅳ部は夔州時期を対象としており、本論文の中で白眉ともいえる部分である。まず、杜甫の居所の瀘西宅がどこにあったかの考証を挙げるべきであろう。梅溪河の西岸にあったとする旧説に対し、近年提起された簡錦松氏の新説では、その東方にある草堂河の西岸であるとする。簡説を支持する立場から、杜甫詩の記述を詳細に検討して、旧説では詩の内部に矛盾が生じることを論じて、草堂河に近接することを導き出す。詩そのものに即して、歴史的事実を復元できることを示す好例といえる。

それにもまして特筆すべきは、使用人の描かれ方に着目したところである。以前から杜甫の一家には使用人が付き添っていて、詩の中で僕夫・僮僕・婢などとして登場していた。しかしながら、夔州期は「阿段」や「信行」のように詩題にその名前が読みこまれるとともに、阿段等に対する杜甫自身の賛嘆、謝意、憐憫の情が詩にうたわれている。それまでは奴僕に対して個人性を賦与していなかったのが、この時期の使用人には、その人柄にまでわたる細やかな観察と杜甫の個人的な親密さが見られ、のみならず個人の名が登場している。かかる最下層の人を特定して詩に取り上げることは、当時であってはきわめて異例のことであり、それに注目したのも本論文のすぐれた点である。また、最下層の人たちの呼び名を書きこんで信頼を示す一方、それとは対照的に、役人への不信をあらわにしていること、やはり社会の底辺層に位置する妓女の名前が、まさにこの時代に詩題に書き込まれるようになった現象と軌を一にすること、そして使用人を詩に読みこむ背景に安史の乱後の社会構造の変化があることを指摘するのを、本論文は忘れていない。

そのことと関連して、砧の描かれ方にも論及する。李白の「子夜呉歌」其の三に代表されるように、砧は秋の夜長に、旅にある夫の冬衣の準備をするために婦人が打つものとして、その物悲しい響きが詩の中で定型化されていた。杜甫は、聴覚的イメージが固定していた砧に、女の細腕にとって重労働であるゆえ疲労しているさまや砧を拭う様子といった視覚的な描写を与え、日常生活に密着した詩のありかたを提示した。そのことが可能になったのは、夔州の瀘西での生活が基本にあったからだと本論文はいう。ここでの底辺層の人々との農的生活があったからこそ、杜甫の詩に童や労働する婦人などが新たに登場するようになり、それが中唐以後の詩の先例になったと論ずるなど、創見に富んでいる。

杜甫の農業詩の限界については、夔州期の稲作経営の長篇詩を俎上に載せて次のように論じる。野菜作りや果樹栽培の詩と趣を異にして、老いにさしかかった杜甫が自分の人生への悲しみをうたっているのは、米作に従事しているとはいえ、実のところは稲田の所有者であって農夫を搾取する立場にあったことに起因する。もし彼が直接農事の現場に赴き、手ずから労働にいそんでいたならば、伝聞と空想による記述が大半を占めているこの詩において、人生の憂いも影をひそめ、ひと味違った明るい詩になっていたであろうと推測する。詩の深い読みと裏打ちされた推断である。また稲作の問題は経営形態ともかわる。通説では夔州府の田地を管理経営したことになるが、本論文は、杜甫の所有する私田であって旅費を捻出するために稲作を行っていたことのほか、収穫後の米を市場で売っていた可能性にも言及する。経営形態については、夔州の権力者が杜甫の名声をもとに貸与して、実質的に生活を支援した可能性もある。この問題は歴史学分野における知見を援用しつつ考察する必要がある。

にもかかわらず、米作にまつわる具体的な事象をくり返し詩に描き、それを通して詩人の思想や感情を表出したのは、六朝時代の陶淵明と並ぶものであり、その深度においてはるかに淵明をしのいでいる。本論文はそのことを指摘するとともに、杜甫が農業詩に占める位置の重要性を喚起する。

杜甫は官界から身を退いた後、秦州・成都・夔州等を転々としながら、半ば隠遁的な農的生活を送り、その中で自ら関わってきた農的生活を繰り返す詩の中に描いてきた。しかし従来の杜甫研究ではほとんど顧みられることがなかったのが実状である。農業詩研究という分野を設定して、開拓者となった本論文の価値はきわめて高いといえる。

以上の審査結果に鑑み、本審査委員会は、論文提出者・古川末喜が博士 (文学) の学位を授与されるに足る資格を有するものと判定した。

論文審査の結果の要旨

氏名	古川末喜
論文題目	杜甫農業詩研究
要 旨	
<p>本論文『杜甫農業詩研究』(知泉書館、平成20年)は、古川末喜が唐詩の理論的側面である韻律論の研究と並行して行ってきた、杜甫詩に関する一連の研究を、一冊の本にまとめたものである。杜甫の研究書はすでに多きを数えるが、農業詩の観点からあつかったのは本書を嚆矢とする。</p> <p>論文全体は十篇から構成されて四部に分かれ、時間軸に沿って杜甫の生涯を順にたどっている。第Ⅰ部「秦州期」は、「秦州期杜甫の隠遁計画と農業への関心」と「杜甫と薤の詩」の二章からなる。この時期の生活が杜甫にとって後の隠遁生活のシミュレーションとして機能していること、薤を杜甫が初めて詩の題材にし、爾後は隠逸をうたう詩にとりいれられることを明らかにしている。第Ⅱ部「成都期」は、「浣花草堂の外的環境・地理的景観」と「農事と生活をうたう浣花草堂時代の杜甫」からなり、杜甫の住居とした成都草堂を、農園としてよりも士大夫が隠遁世界として営む園林と位置づけられること、草堂の農事を描いた詩では消極的な気分が濃厚であるのと対照的に、農事以外の生業を描いた詩では積極的な関わり合いが見られることを指摘している。</p> <p>第Ⅲ部「夔州期の農的生活」は、「杜甫の詩に詠じられた夔州時代の瀼西宅」、「杜甫の農的生活を支えた使用人と夔州時代の生活詩」、「生活の底辺から思いをめぐらす」の三章からなる。この時期に杜甫の居所があった瀼西が、梅溪河の西岸であったとする旧説に対し、草堂河の西岸であるとする簡錦松氏の新説を補強する複数の根拠を提示するとともに、現地で雇用した最下層の異民族の使用人を、従来のように無名の使用人としてではなく、杜甫が一個人として初めて認識したと考えられることを指摘している。第Ⅳ部「夔州期の農事」は、「杜甫の蜜柑の詩と蜜柑園経営」、「杜甫の野菜作りの詩」、「杜甫の稲作経営の詩」から構成され、柑橘を詠じた詩には夔国詩人としての杜甫像とかけ離れた、明るく華やいだ気分が横溢していること、こうした農業詩が杜甫晩年の詩風の拡大に大きく寄与していることを実証するなど、興味深い論及にあふれている。</p> <p>以下では、四つの部に分けて、審査結果を述べる。</p> <p>第Ⅰ部では、759年7月から11月までわずか四か月余り滞在しただけの秦州で制作された詩をとりあげて、農業を題材とした詩の中に杜甫の隠逸志向を読みとる。従来の研究では、滞在期間が短いことと成都での印象が強烈的なことによって、秦州期は長安から成都へ移動する際の通過点と見なされていた。それに対して、本論文では秦州での試行錯誤があつたからこそ、草堂造りがスムーズに進んだと考え、秦州時期が杜甫の人生において時代を画する意義を有しているときえ言う。そうなると秦州を立ち去るにあたって作られた詩では、あたかも掌を返したように、秦州の魅力が色あせて描かれているのがなぜかが問題となる。この落差について、本論文は感情の豊かな詩人は往々にして移り気であると考えているが、この点についてはさらなる考究が望まれる。杜甫以前の詩に見える薤は、そのほとんどが生命のはかなさをうたう民間歌謡「薤露行」に基づいていたが、この時期の詩では食材として薤が描かれ、中唐以後の薤のイメージを切り開いたという指摘は、豊富な資料に基づいており、説得力に富んでいる。</p> <p>第Ⅱ部は760年から765年まで、足かけ六年を過ごした成都時期の詩をもとに、浣花草堂の外的環境</p>	
主査記載 氏名・印	釜谷 武志